

2016年3月6日(日)朝10:10~ 受難節・四旬節第4、オリーブ会等
3月第1聖餐総員公同主日礼拝式説教 日本アライアンス庄原基督教会

説教題：香油を注がれた主

聖書：ヨハネ 12章1～8節

<口語訳>

新約聖書160頁

ヨハネ 12章1～8節

<新共同訳>

新約聖書191頁

ヨハネ 12章1～8節

<新改訳第3版>

新約聖書203～204頁

ヨハネ 12章1～8節 <塚本訳>

新約聖書316頁

主題：主イエス様から賜った聖霊の導き

によって主の弟子たちは、主の名による
神の罪からの救いを宣べ伝えたように、
私たちも、福音を伝えたい。

序論；

- ◇ヨハネ書は、ヨハネがヨハネ書1章14、18節で記録しているように、「ことばが人となった」神の御子イエス・キリストの証言録です。
- ◇ヨハネ書12章1～8節では、イエス・キリスト様が愛されたラザロ、マルタ、マリヤの家を訪問された時、マリヤがナルドの香油を主の足に塗った出来事を伝えている箇所です。
- ⇒ヨハネは、神の御子、主イエス・キリスト様が、マリヤの香油注ぎを、「わたしの葬りの日のため」と語られたことばに注目させています。
- ⇒マリヤが、神の御子の死を理解して、彼女にとっての最高のささげものをささげたのです。
- ⇒それは同時に、ヨハネが、ラザロのことについて(2)していますように、ラザロの生き返りへの感謝があったのです(ヨハネ11:38)。
- ⇒神の御子の罪の身代わりの死は、マリヤたちも、十分認識はしていなかったでしょうが、神の御子は、マリヤの香油注ぎを受け入れて下さっていたのは、大事な事実であり、マリヤの思いを理解して下さったのです。
- ⇒神礼拝は、マリヤの心で主に獻げるものです。

本論；

◇本日、ヨハネ書12章1～8節から主の使信に
思い・心をとめます。

◆ヨハネ12章1～3節；マリヤは、自分の大切な香油を主イエス・キリスト様に注ぎました。

◇1～11節；塚本訳◆ナルドの香油

「1 イエスは過越の祭の六日前に(また)
ベタニヤに行かれた。ここにはイエスが
死人の中から生きかえらせたラザロがいた。

2 するとそこでイエスのために宴会が催され、
マルタは給仕をし、ラザロは相伴客の一人
であった。

3 そのときマリヤは混ぜ物のない、非常に
高価なナルドの香油一リトラ(三百二十八
グラム)をイエスの足に塗り、髪の毛でそれ
をふいた。香油の薰が家に満ちた」と、
ヨハネは語っています。

◇1～3節；「イエスは過越の祭の六日前に
(また)ベタニヤに行かれた」、「ここにはイエス
が死人の中から生きかえらせたラザロが
いた」、「そこでイエスのために宴会が催され、
マルタは給仕をし、ラザロは相伴客の一人で

あった」、「マリヤは混ぜ物のない、非常に高価なナルドの香油一リトラ(三百二十八グラム)をイエスの足に塗り、髪の毛でそれをふいた。香油の薰が家に満ちた」と、ヨハネは語っています。

⇒「**過越の祭の六日前**」は、新改訳聖書の注解にありますように、金曜日の日没、ユダヤ人の習慣では安息日に入っていて、**マルタ**らは、**神の御子**と、夕食をともにしたのでしょう。

⇒**主の弟子たちとの最後の食事・晚餐**は、過越祭の出来事でしたが、ラザロ、マルタ、マリヤらとの**最後の晚餐**は、過越の祭の六日前でした。

⇒「マリヤは混ぜ物のない、非常に高価なナルドの香油一リトラ(三百二十八グラム)をイエスの足に塗り、髪の毛でそれをふいた。香油の薰が家に満ちた」と、ヨハネは語ります。

⇒「**家に満ちた香油の薰**」は、「マリヤの獻げた主への愛のかおり」です。

⇒今日の庄原教会の「**神礼拝**」が、各自の心からの「**混ぜ物のない、非常に高価なナルドの香油かおり**」として、主に受け入れられます。

◆ヨハネ12章4～6節；ユダは、マリヤの獻げ
ることを批判しました。

◇1～11節；塚本訳◆ナルドの香油

「4 弟子の一人で、イエスを売るイスカリオテ
のユダが言う、

5 『なぜこの香油を三百デナリ(十五万円)に
売って、貧乏な人に施さないのだろうか。』

6 ユダがこう言ったのは、貧乏人のためを
考えたのではなく、(会計係であった)彼は
泥坊で、あずかっている金箱の中に入る
ものをごまかしていたからであった」と、
ヨハネは語っています。

◇4～6節；「イエスを売るイスカリオテのユダ」
が、『なぜこの香油を三百デナリ(十五万円)
に売って、貧乏な人に施さないのだろうか。』
と言いますが、「ユダがこう言ったのは、
貧乏人のためを考えたのではなく、(会計
係であった)彼は泥坊で、あずかっている
金箱の中に入るものをごまかしていたからで
あった」と、ヨハネは、ユダの本心を語ります。

⇒ユダの心・主張は、主の心を離れて、主に
仕える心・礼拝の心は、欠落しています。

◆ヨハネ12章7～8節；主イエス様は、マリヤがご自身の葬りの日のための献げものをして語って下さいました。

◇1～11節；塚本訳◆ナルドの香油

「7 イエスは言われた、『構わずに、わたしの埋葬の日のためにそうさせておきなさい。

8 貧乏な人はいつもあなた達と一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではないのだから。』」と、ヨハネは語っています。

◇7～8節；「イエスは言われた」、「構わずに、わたしの埋葬の日のためにそうさせておきなさい」、「貧乏な人はいつもあなた達と一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない」と、ヨハネは、主イエス様の思いを語ります。

⇒主イエス様は、「過越のささげもの」として、ご自身が十字架の死を背負うことをすでに自覚しておられる中で、マリヤの礼拝の献げものは、大きな慰めであったことと思います。

⇒主イエス様の罪の身代わりの死・十字架は、神の愛そのものです。

↔マリヤの共感の礼拝は、主の宝でした。

結論；

- ◇神は、変わらない愛と思いやりの神です。
- ◇ヨハネ書は、ヨハネがヨハネ書1章14、18節で記録しているように、「ことばが人となった」神の御子イエス・キリストの証言録です。
- ◇ヨハネ書12章1～8節では、イエス・キリスト様が愛されたラザロ、マルタ、マリヤの家を訪問された時、マリヤがナルドの香油を主の足に塗った出来事を伝えている箇所です。
⇒ヨハネは、「ラザロ、マルタ、マリヤとの食事」を主イエス様が楽しまれたことを記さず、「ユダの自己主張」と「主イエス様のナルドの香油を注いだマリヤへのことば」に特化して語っています。
- ⇒「過越」は、主イエス様にとって、ご自身の死をもって、神の愛を示す時でしたが、「過越6日前」の時も、「マリヤのナルドの香油注ぎ」による「過越」への主イエス様の死への共感は、「神礼拝の宝」で、主イエス様の慰めでした。
- ⇒罪のための身代わりの死を負えない罪人の私たちには、「マリヤの香油注ぎ」のように、神礼拝に徹する神聴従の生き方のみなのです。